

# 飛騨農林事務所の普及活動状況（飛騨版）

令和2年12月25日現在

## 今月の重点活動

### ■新規就農者 新規就農者激励会を開催

指導農業士会飛騨支部、青年農業士会飛騨支部、飛騨農林事務所の主催による「新規就農者激励会」を、12月16日に高山市で開催した。高山市・飛騨市・農協等関係機関からも出席いただき、総勢40名と盛大な激励会となった。

当日は今年度の新規就農者のうち16名が出席し、「若さを活かし時代に合った魅力ある農業がしたい」「1人でやってみると難しいと感じ、力不足を感じた」「久々野の果物を広め、食べた人を笑顔に出来れば」など、建設的な意見がたくさん出された。農業士からは、適期作業が重要、新品目への挑戦や販売方法等に関する助言の他、関係機関からは様々な支援策があるので気軽に問い合わせしてほしい、といった意見交換がなされた。

農業普及課では、就農後の経営安定に最も力を入れ営農定着できるよう継続して支援していく。



【参加者全員でパチリ】

## 多様な担い手づくり

### ■担い手 飛騨市家族経営協定合同調印式開催

12月17日に飛騨市の主催で家族経営協定合同調印式が開催され、3戸の農家が家族経営協定を締結した。この農家は、後継者の就農及び新規参入による経営開始のタイミングで新たに締結したものである。

3戸とも、経営ビジョン、役割分担や労働報酬、経営継承などの就業条件について家族内でじっくり話し合い、今まで以上に1人1人の能力を活かしながら、農業経営及び農家生活に張り合いと誇りを持つきっかけとなった。

農業普及課では、各農家の家族経営協定内容の実現に向けて今後も継続支援する。



【立会人も一緒にパチリ】

### ■担い手 令和2年度 飛騨就農支援塾トマトコースがスタート

飛騨地域農業再生協議会（担い手プロジェクト）で開催している「飛騨就農支援塾」のうち、トマトで就農予定の研修生、新規就農者を対象として昨年から新設された「飛騨就農支援塾トマトコース」が12月3日から開講した。

講義内容はトマトに関する栽培技術に特化し、植物生理や品種、作型、育苗技術などについて農業普及課トマト担当普及指導員が講義を行った。講義は2月上旬まで継続して実施し、青年農業士を講師とした勉強会も開講予定である。

農業普及課では、今後も研修会の機会を積極的に設け、新規就農者の経営開始や経営安定を支援していく。



【飛騨トマトの作型について説明】

## ■女性農業経営アドバイザー 飛驒ブロック冬季研修会に出席

12月23日に女性農業経営アドバイザー飛驒ブロックの冬季研修会が開催された。

研修内容は、会員間の交流や消費が落ち込んでいる花き生産への理解促進を目的として、正月用の寄せ植えの作成を行った。併せて、飛驒ブロック会員の果樹生産者が6次産業化商品として販売しているアップルパイの試食を行った。

飛驒ブロック会員には花き生産者がいないことから、自らの経営とは違う分野への理解が深まり、有意義な研修会となった。

農業普及課では、研修内容の提案、日程調整等を行った。今後も女性農業経営アドバイザー会員の資質向上に向けて活動を支援していく。



【寄せ植えを作成】

## ■6次産業化・女性起業グループ支援 6次産業化チャレンジ研修

11月25日、ひだあねさ特産グループを対象に「SNSを活用した商品PR研修」を開催した。

ひだあねさ特産グループは飛驒地域の10の女性起業グループからなる組織で、地域の農産物を利用した加工品の製造・販売を行っている。

当日はひだ販促企画の鮎飛龍男氏より、SNSを活用したマーケティング方法や、写真の撮り方、文章の書き方について講義していただいた。ワークショップでは、各自が持ち込んだ商品の撮影会を行い、参加者は講師のアドバイスを聞きながら、真剣に取り組んでいた。

ひだあねさ特産グループでは2月に販売会を予定しており、農業普及課では引き続きグループの活動を支援していく。



【写真撮影のコツを聞く参加者】

## 売れるブランドづくり

### ■水稲 第22回米・食味分析鑑定コンクール結果報告会

12月23日、飛驒地域農業管理センターにおいて11月下旬に開催された第22回米・食味分析鑑定コンクール：国際大会の結果報告会が開催された。

今年は静岡県で開催されたが、コロナウィルスの影響で、無観客で開催され、官能審査や入賞者の発表がYouTubeで配信された。

飛驒管内の入賞者数は、最も権威のある国際総合部門の金賞に5名と全国で最多の入賞県となった。

次年度も再度静岡県にて開催される予定で、農業普及課では、来年の栽培に向け、各地域における研究会等の活動支援を通して、良食味米生産に向けた栽培技術の向上を指導する。



【飛驒米の法被で報告会】

### ■ 水稲 **美味しい米づくり研究会が勉強会を開催**

白川村の水稲生産者で構成される美味しい米づくり研究会が12月3日夜に勉強会を開催した。当日は会員ら20名が参加し、村内で初めて「第22回米・食味分析鑑定コンクール」で金賞を受賞した大田剛之氏からの報告を受け、喜びに包まれた。

農業普及課は、中山間農業研究所とともにコンクールへの出品に際して、ほ場の選定や試料の調整などに協力しており、これまでの苦労が報われる結果となった。この日の勉強会では美味しいお米づくりの方法について中山間農業研究所と講演を行い、次回のコンクールでの入賞を目指して新たな一歩を踏み出した。

白川村では村内産米のブランド化を進めていることもあり、良食味米の生産に向けて今後も支援を継続していく。



【勉強会での講演】

### ■ りんご **第23回りんご「ふじ」品評会を開催**

12月9日、JAひだ果実出荷組合協議会主催による『第23回りんご「ふじ」品評会』が開催された。本品評会は、生産者の技術向上・産地PRを目的に平成10年から毎年開催され、飛騨農林事務所も審査員として開催を支援している。

今年は7月の豪雨や8～9月の高温等りんご栽培には厳しい気象条件であったが、生産者の高い栽培技術により、高品質なりんご32点の出品があった。

出品されたりんごは甲乙つけがたく審査は難航したが、8点を選出し金賞一席の岐阜県知事賞等各賞を決定した。

農業普及課では、頻発する異常気象に対応できる栽培技術指導等、高品質な果樹が安定的に生産されるよう支援を行っていく。



【難航した審査会】

### ■ 果樹 **「飛騨山ぶどう研究会」販売反省会を開催**

12月14日に、「飛騨山ぶどう研究会」の販売反省会が行われ、生産者5名、関係機関3名が出席した。当日は、来年の栽培に向けて今年の販売状況や今後の管理の確認を行った。山ぶどうは、ジュースやジャム、ソースやチョコレートなどいろいろなものに加工され、販路も年々拡大しつつあり、大変好評を得ている。

今年は、大きな霜害もなく着果量は安定しており、問題なく出荷できた。しかし近年、収穫前に果実が腐敗してしまう「晩腐病」が問題となっており、今年も発生が見られた。安定した収量を得るためには、十分な対策が必要になる。

農業普及課では、今後も病害虫対策の徹底をし、安定した出荷が出来るよう支援していく。



## ■夏秋トマト **ダゾメット剤湛水処理による青枯病対策**

今年度のトマト栽培で青枯病（土壌病害）が激発した高山トマト部会生産者ほ場において、農業技術センター病理昆虫部と連携してダゾメット剤（バスアミド微粒剤）の湛水処理による土壌消毒を実施した。この方法は、薬剤処理と湛水処理を組み合わせることによって、効果の安定を目的として行うものである。

実施前のほ場で土壌サンプリングを行ったのち、バスアミド微粒剤をバスサンパー（散布機）で散布、ビニール被覆し、チューブによる灌水を合計8時間行った。

今後は、来年度の作付前に土壌中の青枯病菌の密度を調査するとともに、栽培中にトマト発病株率の確認とダゾメット剤湛水処理の効果解析し、トマトの安定生産につなげていく。



【生産者へ  
処理方法を説明】

## ■夏秋トマト **トマト反省会 各地区で開催**

12月、飛騨蔬菜出荷組合トマト部会の各地域別部会において反省会が行われた。

7月の長雨、日照不足によって様々な病害が発生したため、農業普及課では、JA営農指導員と連携して今年発生した病害の特徴と次年度の低減対策について説明した。併せて、栽培面積が拡大している麗月の特性について土壌溶液調査結果に基づき説明を行った。

今後は各部会において個別相談が予定されているため、農業所得の向上に向けて各生産者の実情に応じた助言を行っていく。



【病害の特徴と対策を説明し  
次年度に備える】

## ■ほうれんそう **成果検討会を開催【スマート農業加速化実証事業】**

12月23日、「夏ほうれんそう産地まるごとスマート農業実証コンソーシアム」の成果検討会が開催された。当事業では①遮光カーテンの自動制御、②ラジコン草刈機、③自動追従型運搬機、④アシストスーツ、⑤出荷予測の精度向上、⑥通信基地局の整備によるデータ蓄積の仕組みづくりの6課題に取り組んでいる。

検討会はWeb会議で開催され、各項目別に実証結果の報告や次年度の計画が報告された。新たに開発が必要となる自動追従型運搬機とAIによる出荷予測については、今年度は試作にとどまり、ほうれんそう栽培期間中の実証ができなかったため早期の完成が望まれている。

農業普及課は、進行管理役として今年度成果の取りまとめを進め、スマート農業技術のほうれんそう経営への導入可能性について検証していく。



【Web会議で議論】

## ■ほうれんそう 個別面談がスタート。来年度の栽培に向けて準備開始。

12月21日、丹生川ほうれんそう部会員全75名を対象とした個別面談がスタートした。生産者1名に対しJAひだ営農指導員、普及指導員が栽培履歴や出荷実績等のデータをもとに30分間面談を行う。今年は夏季の降雨が多かった影響でこの時期の出荷量が減少したため、梅雨期から高温期にかけての管理方法に関する相談が多くみられた。このほかにも土壌物理性を改善する方法、高温期に栽培しやすい品種、ハウレンソウケナガコナダニの防除方法など幅広い相談が寄せられた。



【今年の反省を来年に活かす】

今回の個別面談で個々の生産者が抱える課題、問題点が明確になったので、農業普及課では、次年度はこれらの問題を解決すべく巡回や現地実証を展開していく。